

持続不可能な今日から、持続可能な明日への架け橋

THE 2003 *January* Vol.20 BRIDGE

SPECIAL TOPIC

インスピレーションを与えて くれたヒーロー

Environmental Heroes I Admire

特別レポート

不買運動から素直に学んだ環境マン～木内孝の物語（後編）

大山 弘子

Hiroko Oyama



目次

Contents

2

読者の皆さまへ

For our readers

3

年頭のご挨拶

New Year's Message

4

インスピレーションを与えてくれたヒーロー

フリッチョフ・カブラ

Fritjof Capra

アーノルド・シュルツ：私が心から敬愛する環境のヒーロー

Arnold Schultz: An Environmental Hero I Admire

6

ノーマン・マイヤーズ

Norman Myers

私にインスピレーションを与えた環境人

Environmental Inspiration

10

グンター・パウリ

Gunter Pauli

インスピレーションを与えてくれる人

A Person to be Inspired By

14

エリザベート・サトゥリス

Elisabet Sahtouris

自然資本から成熟したナチュラル・エコノミクス

From Natural Capitalism to Mature Natural Economics

18

大山 弘子

Hiroko Oyama

不買運動から素直に学んだ環境マン（後編）

24

編集部より

From Editors

26

読者の皆さまへ

明けましておめでとうございます。

2003年は、「未来への掛け橋」というより、まずは、目の前の溝が深まりそうな心配がしてなりません。日本の状況も、中東をはじめとした世界の現状においても。しかし、だからこそ「どうなるのだろうか？」と不安がるところか、「こうするのだ！」という強い信念が必要だろうと思います。『ザ・ブリッジ』の筆者たちは、そんな強い「未来観」の持ち主たちだと思います。「ミスター・ゼロエミッション」ことグンター・パウリさんは、とことん自分の信念を貫き、世界各地で非常に面白いプロジェクト、誰もが着手しないようなユニークな取り組みを実らせています。

しかし、もともとは、パウリでも、カブラでも、マイアーズでも、「師」や「メンター」との出会いや、先人の知恵にふれ、その影響で人生が変わり、自分が大きく成長し、そして、強力な「フューチャー・クリエイター」としての自分ができたわけです。

2003年、メンターや先人たちの知恵を大いに活用し、明るい年を「創造」したいものです。

平成15年1月1日

『ザ・ブリッジ』】編集長
ピーターD・ピーダーセン

年頭のご挨拶

明けましておめでとうございます。今年度もどうぞ引き続きご愛顧のほどお願いいたします。

* * * * *

『一市民、一教授の我慢爆発の書』をフューチャー500北陸の鶴謙一さんが近日中に上梓されます。ご著書の「帯」と序文を書きましたのでご紹介します。

北陸、金沢からの呼掛け！

“もう 我慢するのは止めよう 思い切って云おう そして行動しよう”

「はじめの言葉」

私達の大切な国・日本の問題は、理性、道理で理解出来ない国になってしまったことです。その問題を堂々と正直に真正面から説明し、解決の方法を自然体で思い切って提案する著作です。

最近30年の日本の状態を、かつての単一党支配下のソ連、1990年以前の頻りに首相交替が繰り返されたイタリア、そして2000年以前の支配政党内での再編に終始したメキシコの次に歴史家は位置付けるだろうと云われています。

他人の迷惑を省みない若者、法の悪用や虚偽の報告を黙認する企業、自らの過ちを認めようとしない官僚、政治倫理規正法で縛られる政治家、不安や苦悩、奢侈や贅沢が満ち溢れた社会・・・もう我慢が出来ません。

既得権益の保護、自由参入の阻止、社会の平準化が魅力のない社会を創りました。その結果が、株式の日本売り、日本企業に働かざる若者、有名スポーツ選手の海外流失です。その背後には、政・官・業の癒着、陳情・口利き・圧力・無駄遣いの社会、特定業界と企業の為に働く族議員が居ます。しかし、その族議員は私達国民が生んでいます。

精錬潔白、勤勉、節約、親切、孝行が忘れられた日本を、どう再建しますか。

国が減じる、国家が破産するとはどう云うことかを説明します。日本一国だけが遺物化した中央集権的体制に何故しがみ付いているか、組織優先、規制・許認可の免許社会、責任の主体が不明確な為に割り食っているのは私達国民一人一人です。

行け行けドンドンの工業化で、不必要なものが目の前に次々に出現する今日を物質文明の最終段階と理解しましょう。地球の容量は有限で、自分勝手な人類の利己主義がこっぴどい仕打ちを受ける前に私達は猛反省をし、地球の征服者ではなく地球共同体の一員として善く生きることを考えなければなりません。

私達は待つてはいられません。待てば待つ程、事態は悪くなります。

古い体制のしがらみを持たない若者、これまでの常識にとらわれないばかり者、日本を脱出していたよそ者、日本の枠にとらわれない外国人、そして大切なのは高度成長の表舞台から遠ざかっていた女性・・・やれば出来るの気概を持って今のピラミッド型の階層構造を逆さにすることです。日本人の10人に9人が選挙で投票に行けば族議員が払拭されます。自分のことは自分です、自分が変わらなくては社会は変わらない、私達住民が自己責任で地域の自治を考えることが基本です。日本国民の意志で作られていない憲法の改正をします。エネルギーの自給度・食料の自給度の向上問題を理性と道理から考え改善します。合理性のない今日の日本を 国民の意志と国民の行動力で改革します。資本主義的市民社会を新しい市民社会に変えるのです。

私達の心臓を再び鼓動させるキーワードは競い合って新たな価値を創り出す『競創』です。

平成15年1月1日

NPO法人・フューチャー500
理事長 木内 孝

物理学者、システム理論学者



1974年に世界的なベストセラー『タオ自然学』を著し、ニューサイエンスの旗手として世界的名声を博す。その後、アメリカ、カリフォルニア州バークレーにてエコロジーに関する知識と意識の普及を目的とするエコリテラシー・センターを創立し、現在代表を務めている。

新しい未来を築く「知識」も「思想」も、そのもとは「ひと」。そして「ひと」をつくるのはやはり「ひと」のような気がします。今はエコリテラシー教育で地道な活動を続けるカブラさんは、どんな「ひと」からインスピレーションを得てきたのでしょうか？ そのひとによる「何十年にも及ぶ無視の啓発的な講義」に、カブラさんが見たものとは。そしてそこに、私たちは何を見ることができるのでしょうか？！

アーノルド・シュルツ：私が心から敬愛する環境のヒーロー

持続可能な社会の構築を目指す取り組みの第一歩はエコロジカル・リテラシー（環境の「読み書き算盤」）ができるようになること、すなわち生命ネットワークを維持するために生態系が作り出した原理原則を理解することである。これには、全体的思考とか「システム思考」などと呼ばれる新しい考え方が必要となる。これは、ものの関係、類型、脈絡という視点からものを考えることである。

環境をこの全体的観点から考えることを教えてくれた最も偉大な教育者の一人がカリフォルニア大学バークレー校名誉教授であり、天然資源学部で学生から心の師として敬愛されたアーノルド・シュルツ教授である。過去25年間に渡りシュルツ教授は何千人もの学生に環境学とシステム思考を教えてきた。学生たちは敬愛の情を込めてシュルツ教授を「アーノルド」と呼んでいる。

1950年代後半、アーノルドは自らの教えの真髄を伝えるために「エコシステムロジー」と

Arnold Schultz: An Environmental Hero I Admire

The first step in our endeavor to build sustainable communities must be to become "ecologically literate", i.e., to understand the principles of organization that ecosystems have evolved to sustain the web of life. This requires a new way of thinking, known as systemic thinking, or "systems thinking". It means thinking in terms of relationships, patterns, and context.

One of the greatest teachers of ecology from this systemic perspective is Arnold Schultz, Professor Emeritus of the University of California at Berkeley and well-loved mentor of its College of Natural Resources. For the past quarter of a century, Professor Schultz taught ecology and systems thinking to thousands of students, who know him affectionately as "Arnold".

In the late 1950s, Arnold coined the term "ecosystemology" to convey the es-



Arnold Schultz

いう言葉を造った。この言葉の最初の2音節は「エコシステム（生態系）」であり、その後に「ology」が続く。「ology」はギリシャ語で「言葉」、「思考」、もしくは「講話」を意味する「logos」を語源としており、通常「～の学問」という意味で使われる。つまり、「エコシステムロジー」とは「エコシステムの学問」のことであり、アーノルドはこれを極めて広義に捉え、常に人間、ならびに人間の思想、価値、文化を含めて使っている。「エコシステムロジーは、エコシステムをその複雑性のあらゆる観点について学ぶ学問になっている」とアーノルドは書いている。

また、この言葉の後ろの二音節を取ると「システムの学問」と解釈することもできる。さらに最初と最後の音節を組み合わせると「エコロジー」となり、その間に「システム」が挟まれていることになり、私はこれをシステム思考に力点を置いたエコロジーの研究と解釈している。これらの解釈は全てアーノルドが作った啓発的な「エコシステムロジー」という言葉と共鳴し合うものである。

バークレー校で今や伝説となった革新的な「エコシステムロジー」講義の中で、アーノルド・シュルツは、随筆や寓話、詩歌、科学、哲学、芸術、ユーモア、そして偉大な自然の美を觀賞できる場所への巡礼を通じて、学生たちに広範に及ぶエコロジーの概念について手ほどきをした。エコロジーに関する完全な知識とは、自らの思想、価値、文化、技術、社会機構を持つ我々人間が自然のエコシステムの中にどのように組み込まれているのかに関する知識も含むものでなければいけないことを彼は常に強調した。「人間には、思想、方針、理論、規則や規制、管理活動などが必ず付いてく

sence of his teaching. The first two parts of this term form the word "ecosystem", followed by "-ology", which is derived from the Greek *logos* ("word", "thought", or "discourse") and is commonly used in the sense of "the science of". So, ecosystemology is the science of ecosystems, which Arnold understands in a very broad sense, always including human beings and their ideas, values, and cultures. "Ecosystemology," he writes, "is designed to study ecosystem in all its complexity".

The last two parts of the term, "systemology", could be interpreted as "the science of systems"; and if we combine the first and last part, we get "ecology", interspersed by "system", which I interpret as the study of ecology with special emphasis on systems thinking. All these meanings resonate in Arnold's evocative term "ecosystemology".

In his innovative courses in Ecosystemology, which have become legendary at Berkeley, Arnold Schultz introduced his students to a broad conception of ecology through essays, parables, poetry, science, philosophy, art, humor, and pilgrimages to places of great natural beauty. He always emphasized that thorough ecological knowledge must include the knowledge of how we human beings -- with our ideas and values, cultures, technologies, and social institutions -- are embedded in nature's ecosystems. "Along with the human beings," Arnold writes, "come ideas, poli-

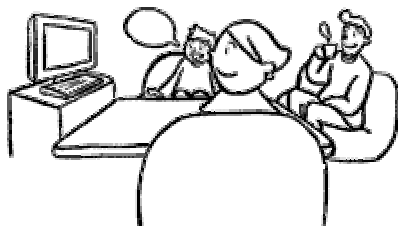


[Click here for our new Alumni & Friends Page!](#)

る。これらもやはりエコシステムの構成要素であり、除外することはできない。」とアーノルドは書いている。

エコロジーに対する豊かで熱い思いを胸に、アーノルドは学生たちにエコロジーに関する健全な知識を教えただけでなく深遠な体験の機会も与えた。「無数の事実や数値に裏打ちされたエコロジーの原理原則を教えるだけでは絶対に不十分だ。生きとし生けるもの全てとその土地に対する思いやり、愛、誠実さを育まなければならない。頭だけではなく、心で学ぶことだ。」と彼は述べている。

アーノルドは定年退職の年齢を越えた後も長い間通年講義で教鞭をとっていた。そして、大学側から教壇を去るよう説得された後も、自宅の大きなリビングで、アーノルドを崇敬して彼の周りに集まり床に座る若い活気溢れる学生たちにエコシステムロジーを教え続けた。



長年に渡って教鞭をとる中で、アーノルドは何千人もの学生たちに、エコシステム全体について考えるよう、そして熱意ある環境の教育者になるよう働きかけた。この25年余の間に、彼の学生たちは、環境問題へのソリューションを開発し、環境に関する著書を著し、絶滅危惧種保護を目指す国際的な取り組みのリーダーとなった。また、彼の教えた学生の中には、自ら環境団体を組織するもの、自然保護地区の生物学者や自然資源の管理者になるもの、NGOにコンサルティングサービスを提供するもの、環境教育に携わるもの、政府機関の長となるものもいた。

cies, theories, rules and regulations, management practices, etc. These also are components of the ecosystem. You can't leave them out."

With his rich and passionate approach to ecology, Arnold not only taught his students sound ecological knowledge, but also provided them with profound experiences. "I am convinced," he maintains, "that teaching ecological principles, fortified by countless facts and figures, won't cut it. We have to develop empathy, love and loyalty to all life and to the land... We must learn with our hearts as well as with our brains."

Arnold taught his annual course well beyond his official age of retirement, and when the University finally persuaded him to leave, he continued teaching Ecosystemology in his large living room to a lively crowd of adoring young students, gathered on the floor around him.

Over his many years of teaching, Arnold encouraged thousands of students to think about whole ecosystems and to become fervent environmental educators. For more than 25 years, his students have developed solutions to environmental problems, written environmental books, and become leaders in international efforts to protect endangered habitats. Other former students have formed their own environmental organizations, serve as conservation biologists and resource managers, provide consulting services to NGOs, engage in environmental education, and lead government agencies.

我々の時代が直面する大きな課題は、世界経済を作り変え、人間の威厳と環境の持続可能性が要求するものと整合した世界経済を構築することである。この課題を達成するための概念的・倫理的基盤作りに、私の敬愛する環境ヒーローであるアーノルド・シュルツの何十年にも及ぶ無私の啓発的な講義が果たした役割は決して小さいものではない。

The great challenge of our time is to re-shape our global economy by making it compatible with the demands of human dignity and ecological sustainability. The conceptual and ethical foundations for meeting this challenge were built in no small part by my environmental hero Arnold Schultz, during many decades of selfless and inspired teaching.

(和訳：岩元淑美)





環境・開発コンサルタント

2001年旭硝子財団による国際的地球環境賞「ブループラネット賞」受賞。

環境問題を総括的にとらえ、刺激的で前向きな行動計画や解決策を数々打ち出してきた。ガイア理論の権威としても世界的に知られている。

分野に捕らわれない数々の理論と提案を打ち出し2001年に国際的環境賞「ブループラネット賞」を受賞したマイヤーズさんも、ひとにインスピレーションを受けて自らの力としてきました。彼自身が実践する、自らのヴィジョンを貫く強靭さと、他者にメッセージを伝える力の源泉が紹介されます。

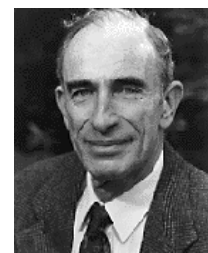
私にインスピレーションを与えた環境人

カリフォルニア大学の学生であった1970年に、私は、環境と人口のエキスパートである、ある客員教授の話聞きにいった。その教授の講義は、通常のアメリカの大学における講義時間より長く、1時間を軽く越えていたが、授業の後いくらかの生徒は、話が終わってしまうことをすごく残念に思っていた。彼は、そのトピックに関して確固とした長い統計リストを示し、次から次へと論点とメッセージを届けてきた。私の学生時代を通じて、ポール・エアリッヒ博士によるレクチャーからほどたくさんのことを学んだことはなかった。

私が学んだのは、彼の話す内容だけではなく、彼の話し方そのものもだった。上背があり威厳のある彼は、科学的権威そのものだった。自分の話している内容を完全に把握し、主張が最初から最後まで筋が通っていることを、私たちに確信させた。もし、狂ったかのようにインスピレーションを受けたまだ若い生徒がどんなことを言っていたか聞きたいと思ったら、当時の私に聞いてほしい。そのときそこで、私は植物や昆虫だけを研究すまい、人口増加がもたらす圧力について、そして、聴衆に対して嵐のようにメッセージを伝える方法についても学ぼう、と決心したのである。

Environmental Inspiration

While I was a student at the University of California in 1970, I went to listen to a visiting professor, who was an expert on environment and population. He spoke for well over an hour -- much longer than was usual at American universities -- and people said afterwards, that they sat there dreading the moment when he would stop. He presented a lengthy list of sure-fire statistics on his topic, hammering home his message with point after bang-bang point. During all my time as a student, I did not learn as much from a lecture as this one by Paul Ehrlich.



Paul Ehrlich

It wasn't only what he said; it was the way he said it. A tall and commanding figure, he was scientific authority itself. Totally on top of his subject, he persuaded us that his case was on target all along the way. If the reader wants to hear of a *then* youthful student who was inspired like crazy, I was he. There and then, I decided that I would not only study plants and insects; I would learn about the sheer pressures of too many people. I would also



learn how to "project" to an audience with storming style.

私は、(英国から)カリフォルニアに行く前に、『人口爆発』という最初の著作からポール・エアリッヒ博士のことを知っていた。この本は議論の説得力と読みやすさにおいて素晴らしかったので、私はこの本によってメッセージは世の中に伝わったと思い込んでいた。しかしこの本は、人口と環境に関する考え方の革命を数多くの人にもたらしたが、同時に、彼の大学の同僚を含めて様々な分野から嵐のような批判も引き起こした。プロの科学者である彼は、大学の伝統に逆らって一般向けの本を書いて、いったい何をしようとしていたのか？ より幅広くメッセージを伝えようと、テレビに出てまでして？ 当時そのようなことは、全く前例がなく、許されるはずのないことであった。

その後私は何年も、エアリッヒ博士の活動を注視してきた。私は彼を、エコロジー、遺伝学、エコシステムロジー、進化論、経済学、社会学、そして環境問題に関わるあらゆる分野を含めたエキスパートのなかのエキスパートとして知るようになった。そしてまた、私は環境学者としてのキャリアを築こうともがいているときに、心からサポートしてくれる同僚としての彼も知ることにもなった。私もまた、すべての同僚が思っているほど誠実であるわけではないことを知った。わたしの環境に対する考え方のいくつかを「邪悪」だと仲間の科学者に描写されたとき、エアリッヒ博士のことと、彼がずっと激しく、そして私以上に受けた多くの攻撃に耐えていたことを思い起こした。

そして何よりも、ハイキングや食事、そして単なるチャットまで、仕事に関係のない様々

I had heard about Paul Ehrlich before I arrived in California, having come across his first book, *The Population Bomb*. The book was so compelling in its arguments and so readily readable, that I supposed it would have carried all before it. Then, I learned that while Ehrlich's book had triggered a revolution in many people's thinking about population and environment, he had also run into a firestorm of criticism from many sides, including certain of his academic colleagues. What was he -- a professional scientist -- doing, writing a popular book, all against university tradition? And then, he was going on television to spread his message further? Simply unheard of; shouldn't be allowed.

Over the years, I've followed Ehrlich's activities closely. I've got to know him as an expert's expert in a whole variety of fields -- ecology, genetics, ecosystemology, evolution, economics, sociology, and whatever else relates to the environmental cause overall. I've also come to know him as an exceptionally supportive colleague while I was grappling with an environmentalist career. I, too, have found that not all professional colleagues can be as genuine as might be supposed. When a fellow scientist once described some of my environmental views as "evil", I thought of Ehrlich and the far harder knocks he has endured, and many times more of them than I would ever encounter.

Best of all, I've spent time with Ehrlich in all manner of "non-business" ways,

な形で私はエアリッヒ博士と時間を過ごした。あなたが彼の食卓に座ったら、彼はおそらくラベルがカバーで隠されたワインボトルをそこに置いて、種類と生産年度をあててみてよ、と言うだろう。氏は、そうやって愉しむのが好きな人だった。



私にインスピレーションを与えてくれた人は他にもいる。一人は、私のカリフォルニア大学時代におけるアドバイザーである。しかし私が最初に師事したのは実はその人ではなく、国際的に名のある自然生物の教授であった。そして私は早々に落第してしまった。そしてその教授に代わる人を探し出した私はすぐに、私のように異議をすぐ唱える生徒をあえて取ろうとする教授はいないことを知ることになる。私は、入った数ヵ月後に大学をやめなければならないかもしれないという状況に陥った。そして私は、無名に見えたアーノルド・シュルツ教授にアプローチをした。「無名に見えた」というのは、彼が徹底して学際的であり、“主流でない考え方”を強みとする学者であったことから数名の同僚達からは警戒されていたからである。しかし彼は私を受け入れてくれ、私はバークレー時代に彼から最も多くのことを教わった。私が大学を離れるその日、教授は私がここで学んだ最も大切なことは何かと聞いた。私は半分真剣、半分冗談で、「どうやってシステム（体制）を出し抜くか」と答え、彼は「そのことほど大切なことはない」と答えた。シュルツ教授によるこの言葉は、それから30年間に私の支えとなった。

その他に私にインスピレーションをくれた人がいる。ハーバード大学のエドワード・ウィルソン教授は、科学的な天才であり、特別に勇敢な人である。名声のある聴衆に講義をしているときに、数百人の目前で彼に批判的な一

whether hiking, dining or simply chatting. When you sit at his meal table, he is likely to put a bottle of wine on the table with its label concealed by a sock, inviting guests to guess its type and vintage. Ehrlich likes his fun.

There have been other inspirational people for me. One was my main supervisor at the University of California. I did not start with him; rather, I chose a wildlife professor of international repute -- and I promptly fell out with him. I looked for an alternative guide, and found that other professors did not care to take on such an argumentative student. I was faced with the prospect of having to leave the university just months after arriving there. Then, I approached a minor-seeming professor, Arnold Schultz -- "minor" since he was regarded with caution by certain of his academic colleagues, being strictly interdisciplinary and with a forte for "sideways thinking", i.e., unorthodox thinking. He took me on, and I gained more from him than from any other individual at Berkeley. On my last day at the university, he asked me what was the most important thing I had learned. Only semi-seriously, I replied "How to outwit the system." He responded, "You could not have learned anything more important." This single comment from Schultz has been of much use to me during the following thirty years.

I have benefited from lots of other inspirational persons. Ed Wilson of Harvard University is a scientific genius, and an unusually brave person. While lecturing to a prestigious conference audience, he found one of his critics went so far as to throw a

人がウィルソン教授に水を投げかけたことがあった。しかし、教授は止まることなく講義をそのまま続行した。そして、彼のその態度そのものが、提供していた科学的分析すべてよりも、聴衆が彼の主張を受け入れる説得力を与えたのである。これもまた、私にとって重要な教訓であった。

同じように、私は本誌にもよく寄稿しているレスター・ブラウン氏を敬愛している。最上級の思想家であり、環境・人口・エコノミクス・消費・安全保障・その他数十の分野の間をつなぐ関連性分析のマスターである。しかし彼もまた、学会からたくさんの批判を受けてきた。その理由はまさに、彼が違った考え方をするからである。彼は世界で最初に、中国が穀物輸出国から主要な穀物輸入国へと転換する可能性について警告した人である。最初は、彼の結論は受け入れられなかっただけでなく、おおくのいわゆる権威たちからばかにされたのだが、いまやこの考え方は主流的考えの一部となっている。



Lester R. Brown



Peter David Pedersen



そして最後に、私が別の意味で環境分野におけるパイオニアであると常々思う人がいる。東京に住むデンマーク人としてその人は、どの日本人とも同じくらい流暢に日本語（そして英語も）を話せるまで自ら学習した。それ自体、非凡なことである。そして更に注目すべきことに、彼は産業界と環境の関係に特化した、日本で初のコンサルティング組織を立ち上げた。組織を始めるときに避けることのできないたくさんのフラストレーションにも関わらず、彼は環境主義者でもビジネスにおいて成功することができることを証明しているところだ。遠く離れた英国に住む、一人の環境コンサルタントとして、彼は私にとってのインスピレーションである。ありがとう、ピーター・デイヴィッド・ピーダーセン。

jug of water over his head in front of several hundred people. Wilson did not pause, but went right ahead with his lecture -- and his gesture did more to persuade the audience to accept his case than all the scientific analyses he supplied. Another profound lesson for me.



Edward Wilson

I likewise admire Lester Brown, who often writes for *The Bridge*. A superlative thinker and a master of "analytic linkages" between environment, population, economics, consumption, security and a dozen other fields. He too has attracted much criticism from academics, precisely because he thinks differently from them. He was the first to alert the world to the prospect that China would switch from being a major grain exporter to becoming the world's leading grain importer. At first, his conclusion was not only rejected, but derided by many so-called authorities, but now it has become established as part of mainstream thinking.

Finally, there is one person whom I often think of as an environmental pioneer in a different sense. A Danish man living in Tokyo, he has taught himself to speak Japanese as fluently as any citizen, plus English (and American). That alone is exceptional. More remarkable still, he has set up the first consultancy organization in Japan specializing in environment in relation to the corporate world. Despite many start-out frustrations, he is proving that an environmentalist can prosper in the business field. For me as an environmental consultant living in far-off England, he too is an inspiration. Thanks, Peter David Pedersen.

(和訳：小林 一紀)

ZERI ファウンデーション代表 ゼロ・エミッション提唱者 www.zeri.org



「ゼロ・エミッション」を提唱し、ヨーロッパ各地でビジネス、文化、政治、環境などで起業家として非凡な才能を発揮し、世界初のエコロジカル工場を設立する。6カ国語を駆使。現在、国連開発計画(UNDP)とスイス政府の出資を得て「ZERIファウンデーション」(ZERI)を創設し代表を務めている。

パウリさんのEメールには、「ZERI is uncompromising, yet self-evident (ZERIは妥協せず、自明なことだ。)」と署名がついています。その確信と力強さはどこから来るのか。それは、まだ学生であったときに自らコンタクトをとった、あるメンターとの出会いから培われてきたものでした。パウリさんが尊敬してやまないそのひとから、私たちは何を学ぶことができるのでしょうか？！

インスピレーションを与えてくれる人

A Person to be Inspired By

アウレリオ・ペッチェイは、MITの科学者チームにより1972年に執筆された有名な『成長の限界』レポートを発行したシンクタンク「ローマクラブ」の創立者である。このローマクラブの最初のレポートが、世界中で数百万部数販売され、凄まじい論争を巻き起こした。彼より、国家首脳を動員する能力を有した組織は、ほとんどない。ペッチェイ博士が議長を務めるミーティングにおいてはいつも、単に議論をするのではなく、具体的なイニシアティブについての合意がとられるのであった。

Aurelio Peccei is known to the world as the “Founder” of the Club of Rome, the remarkable think tank that published the famous *The Limits to Growth* report, written in 1972 by a team of scientists from MIT. The first report to the Club of Rome sold millions of copies, and stirred massive debate. There are few organizations, which have had the capacity to mobilize heads of state, as Aurelio Peccei. When meetings were chaired by Dr. Peccei, it was not to discuss, but to agree on concrete initiatives.

Aurelio Peccei



データファイル

ローマクラブ Club of Rome

1968年に世界の科学者、経済学者などが集まって活動を開始した民間組織。環境、人口問題等の地球的規模の課題により想定される人類の危機をいかに回避するかを探ることを活動目的としている。

成長の限界 The Limits of Growth

1972年にローマクラブが発表したレポート。人口増加や環境悪化、資源の消費などが現在のまま続けば、100年以内に地球上の成長は限界に達する、と成長から持続可能な均衡への方向転換の必要性を科学的に示した。開発中心の当時の社会に警鐘を鳴らし、地球環境問題への取組の原点と言われている。

それにしても、イタリア人としてFIAT社の最高幹部を務め、アリタリア航空を設立し、オリベッティ社の会長を務めた、先進国では比肩するもののないビジネスマンが、サステナブル・ディベロプメント(持続可能な発展)に、これ程まで身を捧げることができた理由は何だろうか? ビジネスの核心について、あえて疑問を投げかけるビジネスマンは数少ない。そしてもしそれができたとしても、根本的な「違い」を作るためにどのような変化が必要かという議論を、他者を動員して巻き起こす能力がある人はほとんどいない。

石油ショックが起きたとき、それが引き起こした危機的状況を見ても、当時の経済システムに劇的な改良が必要であることは明らかであった。実は、当時の経済モデルに関しては、すでに「黄金の60年代」の段階で、ビジネスでキャリアを築いていたペッチェイが最も強烈に構造改革の要請をしていた。その要請は、経済成長がまだまだ続いていた当時、聞き入れられることはなかったのだが。アウレリオ・ペッチェイは、「黄金の60年代」にはすでに、経済・社会・エコロジーの危機が起こるすべての要素が揃っていることを見抜いていた。一人の生徒にすぎなかった私は、この経済的危機のときに彼に連絡をとり、アドバイスを求めた。「いったい、一人の生徒として私に何ができるのでしょうか?」驚いたことに、彼はきちんと返事をくれ、それが私のキャリア

How could an Italian top executive of FIAT, a founder of Alitalia, a chairman of Olivetti and a business developer without parallel in the developing world be so dedicated to sustainable development? There are few business executives who have *dared* to question the core of business operations. And if they do, they seldom have the capacity to mobilize others to follow in debating the changes needed to make a fundamental difference.

During the oil crisis, it seemed quite obvious that the crisis triggered required dramatic improvements in the prevailing economic system. The strong request for an adjustment of the economic model came during the Golden Sixties from a person who had made his career in business. It was formulated -- though not listened to -- when growth was still unrelenting. Aurelio Peccei was convinced that the Golden Sixties had all the ingredients for an economic, social and ecological crisis. As a student, I contacted Aurelio Peccei during that economic crisis and asked for his advice. What could a student do? To my great surprise, he responded and influenced my career path.

データファイル

フィアット社 FIAT

1899年7月11日、自動車の製造工場として、Fabbrica Italiana di Automobili Torino(後に頭文字を取ったFIATが正式名称となる)という名前で、イタリア・トリノに設立された。以来1世紀に渡り自動車製造を中心に発展を続け、現在では様々な分野にその活動の場を広げ、世界各地に工場や施設を持つイタリア最大のグループ企業となっている。

オリベッティ社 Olivetti

1909年、カミオ・オリベッティがイタリア事務器機メーカーとして創業。

に影響を与えることになったのである。

アウレリオ・ペッチェイは、レーニンの第一次五カ年計画を研究し、経済学で博士号を取得した。彼のキャリアは1930年代の中国で飛行機工場を建てるところから始まった。第二次世界大戦中には全体主義者による拷問を受けたが、その後FIAT社の最高幹部としてイタリアに帰還した。彼は、日本を訪れたときに当時NEC社長であった小林宏治博士と出会い、二人は「世界が盲目的に選んでしまった道をそのまま辿らせることはできない」とすぐに理解しあった。そして大来佐武郎博士(後の外務大臣)や永井道雄博士(後の文部大臣)といったビジョナリーたちとともに、人生の様々な段階にいる個人の世界的なネットワークを築き、この発展の道は正しいものではないという意識を高める努力をした。



産業界が、自身の有しているパワーと限界に気づくとき、そして個人が、アイデアや他者を動員して行動する自身の能力を意識するとき、私たちはパラダイムシフトが起きる点にいることを知る。このようなリーダーシップが、今日欠けていることは明らかだ。

アウレリオ・ペッチェイは、このヴィジョンを数百万の人にコミュニケーションする能力だけでなく、科学・政治・社会科学の分野から専門家を動員し、何ができるのか、何がなされるべきか、そして次に何をすべきかに関して共通の理解を形成する能力を備えていた。

彼は晩年、「既得権益層」が、自分たちの立場を脅かすような変化を遅らせるために打ち立てた障害について次第に気づいていった。そして彼は、自分のもっているエネルギーの大半を、若者に対して注ぐようになった。『未来のための100ページ』という本を著し、次の世代に向けて大胆にアピールした。もし次の世代が、より良い世界を想像しないとしたら、

Aurelio Peccei obtained a PhD in economics, studying the first five-year plan of Lenin. He started his career building a plane factory in China in the 1930s. He returned as a top executive of FIAT, after suffering torture by the fascists in the second world war. When Aurelio Peccei came to Japan, he met with Dr. Koji Kobayashi, who was then the president of NEC; the two reached a quick understanding: we cannot leave the world on the path it has blindly chosen. Together with visionaries in Japan such as Dr. Saburo Okita (later minister of foreign affairs) and Dr. Michio Nagai (later minister of education), Peccei built a worldwide network of individuals from all walks of life, to jointly raise the awareness that the course of development was not the right one.

When business is aware of its power and its limitations, and when individuals are conscious about their capacity to mobilize ideas and people, so that action can follow, then we know that we are on the verge of a paradigm shift. It is clear that this kind of leadership is missing today.

Aurelio Peccei had both the vision and the capacity to communicate this vision to millions, and also the capacity to mobilize the few from science, politics and the social sciences to come to a common understanding of what can be done, what has to be done, and what should be done next.

In his last years, Aurelio Peccei grew increasingly aware of the obstacles of traditional interests groups erected in order to slow down change, which would undermine their present position. He dedicated most of his energy to the youngsters. He made a bold appeal to the next generation in his book “*Hundred Pages on the Future*”. If the next generation does not imagine a better world, and does not do something about

そしてもし自分たち自身で何かをしなかったら、何も起こらない。私は、彼と何年もともに働くという喜びと榮譽をえた。彼は私に、システム思考を紹介し、私自身のアイデアの実践者となり、夢を実現するように闘うよう励ましてくれた。

もしかしたら、今の世界に足りないのは、ビジョナリーやリーダーだけではないのかもしれない。むしろメンターが、足りないのではないだろうか。無関心に満ちたように見えるこの世界で、メンターなしで、いかにして若者は自信と自由を獲得することができようか。

it themselves, then it will never be done. I had the great pleasure and the honor to work for years with Peccei. He introduced me to systems thinking and urged me to be a practitioner of my ideas, fighting to realize my dreams.

Perhaps the world today is not only missing the visionaries and leaders; it is missing mentors. Because, without a mentor, how can a young person ever have the confidence and the freedom to go on in a world, which so often seems all too indifferent.

(和訳：小林 一紀)





進化論生物学者・未来学者 <http://www.sahtouris.com>

生物学の視点からビジネスを捉え直す前衛的な研究活動を続けている。カナダで博士号を修得し、その後マサチューセッツ工科大学 (MIT) で教鞭をとる。HORIZON/NOVAのテレビ番組に科学担当作家として活躍するかたわら、国連で先住民コンサルタントとしての経歴も持つ。

今号では、一月遅れで先月の特集「自然資本を回復させるビジネス」に取り組みます。現在、米国シアトルの大学で、サステナブル・ビジネスに関する社会人向けMBA(経営学修士)プログラムを教えるサトゥリスさんが、進化論生物学からわかってきた知恵を交えつつ、自然資本を回復させる経済の状態について思いをめぐらせます。

Bainbridge Graduate Institute in Washington State, MBA Program
http://www.bgi.edu.org/mba_cohort_description.aspx

自然資本主義から成熟したナチュラル・エコノミクスへ

「自然資本を回復させる事業」というテーマについて書いてほしいと依頼を受け、私が最初に考えたのは、「自然資本」という言葉そのものについてだった。私たちが「資本」というとき、すぐ頭に浮かぶのはお金のことで、「自然資本」という言葉から、「自然の金銭的価値」を想起してしまう。私たちは、自然資源をできるだけ長くもたせながら、自然から最大の価値を得ようという考え方をしてきた。



私たちがこのような「自然資本」といった言葉で考え、語るのは、産業界の人たちをより環境に配慮したビジネスのやり方に惹きつけるためであり、実際『自然資本の経済』(エモリー・ロビンス、ハンター・ロビンス、ポール・ホーケン著、日本経済新聞社刊)などの本は、エネルギーの効率的生産と使用に始まる、環境配慮技術の素晴らしい事例に満ちている。エモリー・ロビンスは、現在私と共に「サステナブル・ビジネス」に関する新しいMBA(経営学修士)プログラムで教壇に立ち、これらの新たな環境配慮技術を現在の経済システムにいかにして持ち込むかを教えているところだ。

From Natural Capitalism to Mature Natural Economics

Asked to write about "Business that Restores Natural Capital" for this issue, I immediately find myself thinking about the term *Natural Capital* itself. Clearly, when we say "capital" we think of money. So when we say "Natural Capital" we think of Nature's value in money. We think of our ecosystems as belonging to us and having monetary value. We think in terms of getting maximum value from Nature while making our "natural resources" last as long as possible.

We think and talk and this way in order to attract business people to more ecologically sound ways of doing business, and certainly books such as *Natural Capitalism* by Amory and Hunter Lovins and Paul Hawken are filled with wonderful examples of ecologically sound technologies, including efficient energy production and usage. Amory Lovins is one of my fellow faculty in a new MBA program on sustainable business, and his task is to teach how to bring these new ecologically sound technologies into our present economic system.

4半期ごとのボトムライン達成を乱暴に迫るような、獐猛な競争に基づく資本主義経済を超えて移行していくために、このような考え方は重要な価値をもっているだろう。しかし、進化論生物学者としての私の仕事は、自然に内蔵された生命システムがどのような組織をなしており、どのようにサステナブルな進化を遂げているかを教え、私たち人間が自分たちの経済システムの進化においてより効果的にその仕組みを適用できるようにすることである。

残念ながら、産業界の人々は、社会一般の人々と同様に、「自然は、欠乏のなかで際限なき競争をするというダーウィン式モデルに基づいて動いている」と教えられてきた。最近私が参加した「スピリチュアリティとビジネス会議」では、急速に成長している米国の銀行の最高経営責任者が、「我が社は、ほぼすべての競合他社を打ち倒して成長を重ねることによって、“サステナブルな成長”を遂げている」と自慢げに語っているのを耳にした。私がある人にとっての「サステナブル」の定義を質問すると、彼は同じことを繰り返し、「私たちの好き嫌いに関わらず、この世界は生きるか死ぬかの世界なのだ」と、ダーウィン主義に基づいて自分の意見を弁護していた。

本誌の17号(p20)で書いたように、ダーウィンは、食糧不足と飢饉に関するマルサスの論文を読むまでは、自身の進化モデルである「自然淘汰」を説明する“メカニズム”を知らなかった。その論文では、マルサスは人類が幾何級数的な増加で人口を増やしてゆく一方で、食糧生産のほうは算術級数的に増加したにすぎないと主張している。このことはつまり、自然界の子どもらは、全個体に行き渡るほどの食糧がないときには、それをめぐって競わなければならないということなのだろうか？自然界はこのようにして生物の個体を試してきたのだろうか？ だとしたら、この競争に

I understand the value of thinking this way in order to begin our transition out of the fiercely competitive economics of capitalism, with its insistent and tyrannical quarterly bottom line, but *my* task, as an evolution biologist, is to teach the organization and sustainable evolution of Nature's living systems so that we humans can more effectively copy them in the evolution of our own economic system.

Unfortunately, business people, like the rest of society, have been taught that Nature operates on a Darwinian model of endless competition in scarcity. At a recent Spirituality and Business Conference, I even heard the CEO of a rapidly growing US bank proudly portray his company as being in “sustainable growth” by knocking out virtually all its competitors to grow and grow and grow. When I questioned this definition of sustainability, he simply repeated it and then defended it on Darwinian grounds—that we must realize this is a dog-eat-dog world whether we like it or not.



Darwin did not have a “mechanism” for natural selection—his model of evolution—until he read Malthus’ article about food shortages and starvation, arguing that humans reproduced with exponential increase while their food production only increased arithmetically. Could it be that all Nature's young had to compete for food when there wasn't enough for all, Darwin reasoned? Was this how she put creatures to the test? If so, then surely the fittest in this competition would pass the test and survive to grow up and reproduce. It all seemed so clear—large numbers in the face of too little

おける最も適合したものがこのテストに合格し、生き延び、成長し、繁殖することが出来るということになる。すべては明らかであるかに思えた。つまり、食糧に比べて個体数が多すぎるといことが競争を生み出し、そして競争が自然淘汰を招いたということなのか。

しかし明らかに、ダーウィンはあることを見逃してしまっていた。生態系は、「人間が、ある特定の“牙を抜かれた”種を育て消費するが、その種は人間を消費しない」といった、マルサスの描写したいいわゆる“一方通行的な”人間界の食糧生産システムの場合とは違って、「互いを食し、再生利用し合う」種によって成り立っている。自然の種(家畜化された種と対照をなす)は各々が食糧の生産者かつ消費者であり、いわゆる「相恵的な」バランスのもとにあるということ、ダーウィンは理解しなかった。最も豊富な食糧である土壌バクテリアと菌は、植物によって消費され、その植物が動物消費者よりも多く生産をし、その動物自身も究極的には土壌バクテリアと菌によって消費される。こうして、食物連鎖ならぬ、食物サイクルが成り立つのである。動物種は、捕食者-被食者の関係によってお互いにバランスを保ちあい、健全さを保つ。弱い個体や傷ついた個体を取り除き、健康なものを鍛えるのにこのことが重要な役割を果たすことは、昔から知られていたのである。

よって、人間の繁殖と算術級数的にしか増加しない食糧生産に関するマルサスの結論を、あらゆる自然界に対して外挿(推定)するのは、全く論拠のないことだ。なぜなら、自然とは、自身で豊穡さを保ち続けることであるからだ。しかし、競争を通して「最も適合した個体だけが生き延びる」ことが進化の唯一の原動力だという概念が、進化の科学的理論の土台として提供され、それが現在まで主張されてきた。人々は、この“自然な”体系が資本主義的競争に見事に反映されるのを容易に受け入れてきたのである。

food produced competition, and competition led to *natural selection*.



Apparently Darwin did not notice that unlike the human food production system Malthus described, wherein people grow and consume certain chosen and “defanged” species that cannot consume *them*, ecosystems are made of species that eat and recycle *each other*. He failed to see that natural (as opposed to domesticated) species are balanced reciprocally as both food producers *and* food consumers. The most abundant food—soil bacteria and fungus—is consumed by the plants, which in turn produce more abundantly than their animal consumers, which are themselves ultimately consumed by the soil bacteria and funguses, completing not a food chain, but a *food cycle*. Animal species are kept healthy and in balance with each other by predator-prey relationships, long known to play an important role in weeding out the frail or damaged and exercising the healthy.

The extrapolation to all Nature from Malthus’ analysis of exponential *human* reproduction and only arithmetically growing human farming was thus completely unwarranted because Nature is actually about ever self-balancing abundance. Yet the concept of competition in scarcity as the sole driver of evolution was presented as the basis of a scientific theory of evolution that has been promoted ever since. People were readily persuaded to see this “natural” scheme of things in capitalist competition.

資本主義とは、自然における未成熟種の経済学非常に似ている。特に、生態学者が「タイプ1の生態系」と呼ぶものの経済学に似ている。これらのシステムにおいては、若い種が資源をめぐる競争、できるだけ多くの資源を使って素早く、そして無慈悲に繁殖しようとする。しかし次第に彼らは、競争相手を殺すのではなく、食糧を与えることの方が都合が良いことに気づく。何故なら、自分たちの食糧に依存している種の数が多ければ多いほど、自分たち自身のニーズをサポートしてくれるものも多くなるからである。これが、「タイプ3の生態系」、つまり大平原や熱帯雨林において自然が示す、創造的かつ協力的な成熟した経済学なのである。



成長することを拒み、青年期の種が有する自己破壊的な経済モードにとどまることにより自害を遂げるのを望まないのであれば、これこそがまさに、人間の経済学がすぐに反映しなくてはならない協力的な成熟さである。このために、ダーウィンが未成熟な種を描写するだけにとどまり、そのより成熟したバージョンを見ることができなかったことを私たちは認識せねばならないのだ。

このMBAプログラムにおける私の生徒スコット・ボウマンは、私たち人間の事業が成り立っている基盤となってしまった“機械的モデル”から、成熟した生命システムをより反映している“有機的モデル”への転換が必要であることに関して、ちょうど論文を提出している。

生物学では、生命サイクルと生命の頑強さ（つまり、健康、プロセス、システム）の視点から世界を見る。あなたの医師が、あなたの体にヒ素を投入することに関する環境影響評価報告書を書くなどということ想像できるだろうか？「それ

Capitalism is actually very similar to the immature species economics of Nature—in particular, the economics of what ecologists call Type I ecosystems. In these systems, young species compete for resources, using as many as possible to multiply themselves quickly and ruthlessly. Eventually, however, they learn that feeding their competitors works better than killing them off, because the more other species there are depending on yours, the more there are to support your own needs. This leads to a creatively collaborative mature economics of the kind Nature demonstrates in Type III ecosystems, such as prairies and rainforests.

This is exactly the kind of collaborative maturity that human economics must reflect soon—unless we kill ourselves off by refusing to grow up and remaining in the self-destructive juvenile species economic mode. This is why we must recognize that Darwin got stuck in describing immature species and failed to see their mature versions!

Scott Bowman, one of my students in the new MBA program mentioned above, just submitted a paper on the necessary shift from the mechanistic models on which most of our human businesses are founded, to organic models that better reflect mature living systems. He wrote:

Biology views the world in terms of life cycles and the robustness of life - health, process and systems. Can you imagine a doctor filling out an environmental impact report on putting arsenic into your body?

はひどいことだから、そんなこととしてはいけない」とその医者は言うはずだ。もし私たちが生命システムとして、そしてさらに私たち自身の生命システムである身体の一部としての生命システムとして、一連の流れを見ることができるならば、ヒ素を投入するというこの結論を避けることができるだろうか？

体重が400ポンド(約180kg)ある男が「ひざが痛むのです」と嘆きながら訪ねてきたら、良い医者であれば単に関節の具合を検査し人工関節支援装置などの手段を考えるだけではなくて、「何よりも体重を210ポンド(約95kg)減らさない、さもなければひざがだめになる前に心臓発作で亡くなってしまうよ」と助言するだろう。医学的・生物学的モデルにおいては、過剰消費により廃棄物やその他物質を身体のなかに蓄積することは、その生命体や生態系の健康や働きにとって深刻な問題となることは、簡単に理解できる。



システムと健康の観点から考えるならば、私たちは子供の食べ物の中に成長ホルモンを入れるだろうか？もちろん、「それはひどいことだから、そんなこととしてはいけない」。

…もし仮に、私たちが新陳代謝の観点から会社というものを見てみるとどうだろう？ どれだけの生命体を、その会社は支えているか？ 支えている生命体は、どれほど頑強だろうか？ その会社は、資源の使用と廃棄物の排除に関してどれほど効率的だろうか？ その会社は、その周りの環境が支えられる以上の消費をしているのだろうか？ その会社は、その周りの環境に、少なくともそこから取り出しているのと同じだけ返しているだろうか？ その会社は、他社が生命体を支えて頑強にする能力を高めているだろうか、それとも低めているだろうか？ これらは会社に投げかけるための非常に重要な質問であり、事業投資の性質を個人的強欲の満足から、誇りを持つ公的サービスの充足へと変えていくかもしれない。

“It’s a bad thing,” she’d say, “don’t do it.” If we viewed a stream as a living system, and more, as a living system that is part of our own living system – part of our body – could we avoid this conclusion about dumping arsenic?

When the 400-pound guy comes into the office complaining of knee problems a good doctor doesn’t just examine the viability of the joint and what might be done to keep the joint functioning (like artificial market supports). He’ll say, “Lose 210 pounds, or after your knee blows out you’ll die of a heart attack.” In a Medical/Biological model we have no difficulty apprehending that a build up of waste within a body or other accumulations caused by over-consumption are a serious concern to the health and viability of an organism or ecosystem. Yet we drive our very economy by over-consumption. We consider it good business to be able to create the need for things we didn’t know we wanted.

If we thought in terms of systems and health, would we put growth hormones in the food our children eat? “It’s a bad thing, don’t do it.”

... What if we saw a company in terms of its metabolism? How much life does it support? How robust is the life it supports? Is it efficient in its use of resources and its elimination of waste? Is it consuming more than its environment can support? Is it returning to its environment at least as much total value as it takes? Does it contribute to, or detract from, the ability of other companies to support life and be robust? These are very cool questions to be asking of a business, which changes the nature of a business investment from the satisfaction of personal greed to one of public service, something to take great pride in.

私はこの論文を読んで、スコットが機械的思考から有機的思考へ、獰猛な競争に基づいた資本主義から、新しくまだ名のない、成熟した人間による未来の経済システムへの転換について、しっかりと理解したことを知るのである。

I see from this paper that Scott has really absorbed the idea of shifting from mechanics to organics, from a capitalism rooted in fierce competition to the new and yet unnamed economic systems of a mature human future.

(和訳：小林 一紀)





フリーランス・ライター

前号に引き続き、昨年9月17号のエコノミストに掲載された記事のつづきを是非お楽しみください。『ザ・ブリッジ』の発行元「フューチャー500」が設立された経緯とは何なのかを、木内孝のインタビューの中でご覧いただけます。また、この記事の掲載をご許可いただいた大山様に感謝申し上げます。

不買運動から素直に学んだ環境マン ～木内孝の物語（後編）

“ 周囲からは不真面目に見えちゃう ”

志を同じくする企業や団体が集まれば、世界は変わっていくはずだ。そう考えた木内は、1995年にフューチャー500を設立する。ちなみに、フューチャー500は、ビジネス誌『フォーチュン』が選ぶ優良企業リスト、フォーチュン500をもじったものだ。そこには、環境について考える“優良”企業や団体が500に増えれば、という願いが込められている。フューチャー500では、年1回、「産業エコロジー」をテーマにしたワークショップを行なっている。会員企業にはフォードやナイキ、シェル石油、クアーズビール、アドビなどそうそうたる企業が名を連ねている。

FORTUNE

<http://www.fortune.com/fortune/fortune500>

フューチャー500の会長に就任した木内は、積極的にメディアに登場し、熱帯雨林の現状と環境保護の必要性を訴えはじめる。と言っても、テレビや新聞、雑誌の取材に応じるだけではない。毎日早朝、三菱電機アメリカのラジオ・コマーシャルを、木内のラジオ番組にってしまったのだ。もちろん30秒という短い時間だけである。しかし、自社のコマーシャルを自分のトークタイムに変えてしまうという

のは、前代未聞だろう。「三菱電機はよほど懐の深い会社なんですね」と質問すると、木内は「いや、よいと思ったことを断固やるだけですよ」と笑う。



「もちろん、そんなことをするより、もっと売上を上げるとか、もっと儲けるということは始終言われていましたよ。でも、やっちゃったこと、世の中が温かく迎えていることをとやかく言う会社じゃありませんよ。」

こう書くと“偉そう”な人物であるかのように受け取られるかもしれない。しかし、木内には少しも威張ったところがない。木内をよく知る人物も、「主張にも生き様にも価値観にもぶれがない、非常に謙虚で、威張らない人だ」と言う。

筆者が取材で訪れたときも、木内はオフィスで、若いスタッフたちと楽しそうにやりとりをしていた。しかも、木内の席は、両脇をスタッフにはさまれている。机の並びにも表れているように、すべてがフラットなのだ。「三菱電機アメリカの会長の時だって、同じようなもんだったよ」と笑う。「楽道家だし、愉快にのめり込んで生きている人間だから、周囲からは不真面目に見えちゃうみたいなんだけどね。しょうがないや。」

ともあれ、ラジオのトークは好評だった。その証拠に木内が手抜きをすると抗議の投書まで来たし、ラジオ・コマーシャルのベスト10では、三年間上位にいたという。フューチャー500のアメリカでの活動は、それくらい反響があった。



フューチャー500設立の二年後、木内に帰国命令が出る。帰国した木内を待っていたものは、総会屋事件だった。三菱電機が8年間にわたり、年間150万円程度を総会屋に振込んでいた事件だ。木内はこの事件をコーポレート・コミュニケーション担当業務として対応した。自らの苦勞をあまり表に出さない木内が、当時を振り返り「大変だった」と言うのだから相当きつい仕事だったに違いない。1999年顧問になると同時に、フューチャー500日本での活動に本腰を入れ始める。ところが、木内は思ってもみなかった壁に突き当たる。活動資金が集まらないのだ。

「アメリカでは、フューチャー500宛ての手紙を開封すると、当然のように小切手が入っていたんです。ところが日本では、封筒を開けても小切手なんて出てこない。日本にはコミュニティを育てようとする意識がないんだと愕然としましたね。」

暮らしの良し悪しはGDPでは測れない

自由放任型の資本主義は、人間の欲望をかき立て、購買を促進し、経済を成長させてきた。そこでは、自由市場が価格を決定する仕組みが良しとされていた。その価格には、製品をつくる時のコストは反映されても、つくる過程、消費する過程で生じる地球環境への負荷は反映されない。「これは本気で見直さなければならぬ」と木内は強調する。もちろん、豊かな生活を手に入れる手段として、経済成長は必要だった。ところがいつの間にか、経済成

長自体が目的になってしまった。GDP（国内総生産）への盲信もその結果だというわけだ。

「GDPは産業の指標でしかない。にもかかわらず、GDPが2%上がればすべての問題が解決されるようなことを言う人がいます。GDPには、犯罪が減ったとか、町にゴミが落ちていないとか、健康、すばらしい結婚、幸せ感、なんてことは含まれない。つまり、GDPが上がったからといって、私たちの暮らしが必ず良くなるわけではないんです」

それになぜ気づかないのか。木内は今の日本人がuntaught peopleだからだと言う。これは1999年8月にロンドン『エコノミスト』誌に書かれたことだ。直訳すれば、教えられていない国民となる。「自分で知ろうとしないから、教えられない。価格のことも、GDPのこともそうです。その結果、日本人は利己主義で、自分のことしか考えられなくなった」と話す。ちょっと論理に飛躍があるような気もするが、木内が心配するのは、利己的になりすぎた日本人のことだろう。

木内は、手元にあった使用済みの大きな茶封筒をペーパーナイフで切り始めた。何をするのかといぶかって見ていると、切り開いた封筒に自らのビジョンを書き始めた。封筒をメモ用紙代わりに使っているのだ。そこには「将来像、検証、真実、ネットワーク、愛」と書かれていた。「この方針で国をつくる」。木内はそう説明した。

取材後、「あれは方針と言うより木内の日本論でもあるんだな」と合点した。よく考えてみると木内が挙げた事柄は日本に欠けているものばかりだ。凡人の目では見過ごしそうな重要な物事を木内は拾い上げ、見事に抽象化している。木内の非凡な観察眼に感心した。

（終わり）



編集部より

あけましておめでとうございます。

『ザ・ブリッジ』は、本号で20号を迎えることができました。皆様に厚くお礼を申し上げます。

現在の形態では今年5月号までの発行となることを皆様にお伝えして参りましたが、それまでのテーマとして次のようなテーマを追求したいと思います。

2月号では、情報コミュニケーション技術(ICT)とエコロジーの関係について、世界の最先端の思考をお届けします。情報コミュニケーション技術が発達すると、私たちはエコロジーとどのような関係になるのでしょうか？

そして、3,4月号では二号続けて、筆者がそれぞれ過去40年の地球環境の軌跡を振り返り、「現在私たちはどこにいるのか」を総括し、それを基盤に「私たちは今日から何をしなければならないのか」を炙り出します。『ザ・ブリッジ』ならではの率直さで、総括してみたいと思います。

そして5月号は、「最後のメッセージ」として、筆者から一つトピックを選んでもらって思いの丈をぶつけていただこうと考えています。

今年もみなさまにとって、すばらしい年でありませう、編集部一同心よりお祈り申し上げます。

編集部より



THE BRIDGE Vol. 20

2003年1月10日発行

Copyright©Future500, 2003

ザ・ブリッジ編集部

編集総責任者：

ピーター D. ピーターセン

編集部：

小林一紀 本木啓生

寺井真里子 豊田美穂

翻訳：

岩元淑美 小林一紀

フューチャー500 事務局

〒105-0012

東京都港区芝大門1-1-33

三洋ビル3F

電話 : 03-5777-6730

ファックス : 03-5777-6735

電子メール : info-bg@thebridge21.net

HP : www.thebridge21.net

[お断り]

ダウンロードしたPDFファイルを他者へ転送するなど、『ザ・ブリッジ』をご購読者以外の方へ配信する行為は、著作権上固く禁じられています。